

それって、どのくらい？ 小学校文学教材における 質感・量感を意識した想像力の育成

はじめに

小学1年生が学習する物語の中に「たぬきの糸車」(光村図書)という物語がある。おかみさんとたぬきの糸車を通した交流が描かれているのだが、それぞれの登場人物には設定がある。おかみさんは「山奥の一軒家」に住む木樵の奥さんで、この糸車で糸を紡ぐことを生業としている。たぬきも毎晩のようにやってくる「いたずらもの」で、いたずらによって木樵を困らせている。「山奥の一軒家」に住む暮らしとはどんな生活だったのか？いつの時代だったのか？「山奥」とはどんな環境だったのか？「糸を紡ぐ生業」とはどんな暮らしだったのか？たぬきのするいたずらとはどのようなものだったのか？そして、おかみさんはそれぞれの場面でのどのようなことを感じていたのか？など、文学の学習をする際に、言葉が表している事物の内容がどの程度であったのか理解したり、物語に描かれている言葉の周辺情報を理解したりすることで、物語への理解が深まると考える。また、登場人物の心が動く場面の情景に着目し、その情景がどのような情景であったのか五感を基に考えることで、その人物が見ている世界がどのようなものであったのか、人物の心情への理解が深まると考える。物語に描かれている言葉に着目し、それはどのくらいであったのか、量感や質感を意識することで、物語への理解が深まると考え、日々素材研究している。今回は、令和4・5年度に指導を行った4年生・6年生の実践を紹介する。

【物語の設定から質感・量感を意識した想像力】

この物語は、どのくらい昔の物語だったのかな？

「白いぼうし」



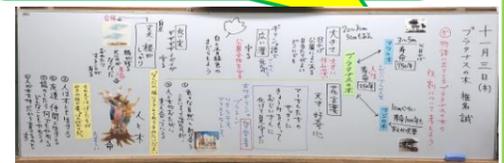
4年生「白いぼうし」の物語は、教科書に多くの作品が載せられている作者あまみきみ氏の初期の作品である。この学習の中で「物語に出てくる女の子はもしもろちようだったのかどうか」について意見を交流した。物語の流れからそうであろうと考える肯定派の児童が多くいる反面、「それではどうやってタクシーの中にもんしろうちようが入ったのか。窓が開いているとは文章からは分からない。」という否定派の児童で意見が分かれた。ここで、白いぼうしが初掲載された「1967年」という時代に着目し、この時代には車の中に冷暖機能がまだなかったことを説明すると、夏が始まったような暑い日に車の中でシャツの袖をたくしあげる登場人物たちの様子に着目し、タクシーの窓が開いていたことを説明する児童の様子が見られた。

4年生「ごんぎつね」の学習では、設定を押さえる学習の中で登場人物ごんの「ひとりぼっち」「小ぎつね」「いたずらばかり」に着目し、野生のきつねは半年程度で親離れし、一人で暮らすようになることを示し、「一人で暮らすのは当たり前のことなのに、どうしてひとりぼっちとを感じるのか」と児童に問いを投げかけた。すると、児童からは「ひとりぼっちと思うくらいさみしい暮らしなのではないか。」や「ごんは幼い頃にお母さんと別れてしまったのではないか。」という意見が出てきた。

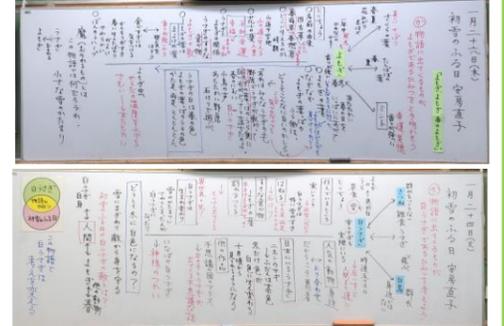
4年生「プラタナスの木」の学習では、描かれていることを理解する学習の後に、「どうして物語の中に出てくる木はプラタナスであったのか。他の木ではいけなかったのか。」と、身近にあるマツやフジの木を引き合いに出して児童に問いを投げかけた。すると、児童は「プラタナス」について調べ、プラタナスの特徴と物語を繋げたり、花言葉やプラタナスの語源となったプラトンとソクラテスを登場人物に当てはめたりしながら価値を見出そうとしていた。

4年生「初雪のふる日」の学習でも、物語に出てきたものがどうして「よもぎ」や「白うさぎ」だったのか、出てくるものの価値について考える機会を設定した。すると、魔除けにもなる「よもぎ」と、冬しか鑑賞として白くならない「雪うさぎ」とには、関係があるのではないかという意見も出てきた。

それぞれの物語に出てくるものは、どうして、それぞれプラタナス・よもぎ・白うさぎだったのだろうか？どんな価値があるのかな？



▲「プラタナスの木」 「初雪のふる日」▼



きつねは、どのくらい生きて、どんな生活をするのかな？

「ごんぎつね」

【五感を意識した想像力】「春の河」「小景異情」



詩や短歌・俳句の世界には、情景を語る「わたし」という語り手がいるという視点から、語り手は何を感じているのか、考えさせる手立てとして「情景キャッチ」(筆者作成)というチャートで言葉を集めている。

「情景キャッチ」では、上部に「語り手から見たもの」を示し、下部には「語り手が感じた音・におい・味」、右部には「季節や時間帯・時を表す言葉」、左部には「語り手が手や体で感じたもの」や「語り手の心情・セリフ・表情など」を示すことができるようになっている。そうすることで、言葉で描かれている世界を読み手が自分ごとのように感じ、言葉の量感や質感を味わうことができるようになる。そして、

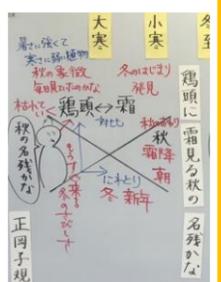
6年生4月の学習である「春の河」「小景異情」の学習では、2つの詩を比較しながら強調している五感表現を基に語り手が伝えたいことについて考えさせ、「春のいぶき」「夏のさかり」「秋深し」「冬のおとずれ」といった情景キャッチによる季節の言葉の学習に繋がっていった。そして、計12句の短歌・俳句の情景描写の解釈を行った。特に、正岡子規の「鶏頭」に「鶏頭は秋の名残かな」という句の分析では、鶏頭の赤い花と白い霧の対比関係を明らかにした後に、「どちらの方が多いのか。わたしは、どちらのことを気にしているのか」と問いを投げかけたところ、「秋の名残かな」と書いてあるので、枯れていく鶏頭の花を気にかけているのではないか」という意見が児童から出てきた。

その他にも、4年生でも6年生でも、百人一首から好きな句一つ選ばせ、情景キャッチによる解釈と分析を行った。以上の実践から、五感を基に情景について考えることは、描かれている世界を理解することに有効であると考えられる。



▲児童の作品 百人一首から一首選んで紹介

「秋深し」より 正岡子規の句



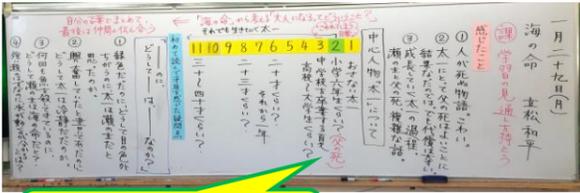
わたし(語り手)には、何が起きているのかな？何からどんな感情をもっているのかな？

「情景キャッチ」



【6年「海の命」授業実践】

「海の命」



6年生「海の命」の学習では、第1時の児童の初発の感想にも出てきた「太一の成長」に着目し、「読者である小学6年生であるあなたと同じく太一は、何場面か」と問いを投げかけたところ、太一の日常が壊れてしまう第2場面だということ考えで意見が出た。そこで、読者である自分たちの立場をこえて成長し続ける太一の物語から、「海の命」から考える『大人になるってどういうこと？』を自分なりの言葉で解釈するという単元目標を伝え、学習を進めていった。児童は自分たちと比べながら問いを持ち、物語への理解を深めていった。

また、本実践では直接描かれていることが少ない太一の心情について、アメリカの心理学者であるロバート・プルチック(1980)が提唱した「感情の輪」を基に解釈と分析を行った。

そうすることで、物語の設定場面にあたる「太一はどんな感情で、与吉じいさんの弟子になろうとしたのか」について解釈を交流した際には、叶わなかった「おとうといっしょに海に出るんだ」という願いに対する「拒絶」や「いらだち」、父の死への「悲しみ」といったネガティブな感情だけでなく、海への「あこがれ」や自分も「挑戦したい」というポジティブな感情が太一にはあり、それらの感情が複雑に入り混じっていると児童は表現することができた。拡散して多様な意見が出た際には、多くの言葉の中からそれぞれの児童が言葉を選びながら思考・判断・表現できるように「どの感情が太一にとって一番強いのか」と追問し、それに対する自分の解釈をふりかえりしてノートに詳しく記述することができるよう指示を行った。

物語の山場場面では、「太一の『こんな感情は初めてだ。』とは、どんな感情だったのか」について解釈と分析を交流した。物語に描かれている「この太一は自分に殺されたがっている」と「本当の一人前の漁師にはなれない」という言葉を軸に、児童は「驚き」「戸惑い」「悔し」「驚き」とともに、父と漁師の主を重なる「哀愁」「悲しさ」「敬愛」などの意見が児童から出てきた。そして、第10場面の「水の中でふっとほほえむ」太一について着目させて、太一の感情の変化について考えさせた。すると、児童からは「敬愛」する感情が、「憧れ」「憧れ」「憧れ」へと変わったのではないかと意見が出てきた。そして、「一人前の漁師への価値観」を養える「思考の転換」が起こったのではないかと意見が出てきた。太一は自分と相反する感情を戦わせた結果、感情を殺し、笑うという行動をすることで漁師の心を殺さないという「決心」をしたのではないかと意見も出てきた。

第3次の学習では、第1次・第2次で単元を通して自分の解釈を深めていった『海の命』から考える『大人になるってどういうこと？』について、交流とロイノートを使ったカード作りを行った。今回の実践では、それぞれの学習で意見交流したことを土台としながらも、児童それぞれの解釈が多様になるよう促していった。その結果、「海の命」から自分が理解したことを根拠に児童が自分の考えとその理由を詳細に表現できたことは有益であったと考える。

参考資料：ロバート・プルチックによる「感情の輪」The Nature of Emotions (fractal.org)
<https://www.fractal.org/Bewustzijn-Besturings-Model/Nature-of-emotions.htm>



もぐり漁師はどのくらいもぐれるの？その間何を考えていたのかな？

3次での児童の作品



太一が読者であるみんなと同じく年齢の場面はどこな？

ロバート・プルチックによる「感情の輪」

物語に直接描かれていない太一の感情は、どのようなものだったのかな？



おわりに

本実践では、言葉を基に量感や質感を意識して想像させることで、登場人物への同化体験が深まると考えた。実際に、量感を押さえることで児童の登場人物への心情理解が深まる場面が多く見られた。物語に描かれている言葉から、どのような周辺情報を理解することができれば深い学びへと繋がる同化体験となるのか、今後、体系化を意識した分類を行う必要があると考える。そうすることで、児童が深く理解する場面や教師の揺さぶり発問による思考・判断・表現する場面だけでなく、児童が主体的に思考していく場面でも有効な学びの観点になると考える。

来年度は、児童が量感や質感を意識して想像することができるよう、今までの素材研究の成果をまとめて分類・体系化させ、より充実した指導ができるよう国語科の研究を行っていきたい。